

# 『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る

## 天照大神の両性具有性

吉 田 唯

### はじめに

本論では、『日諱貴本紀』の国譲り神話における天照大神の両性具有性について考察する。

『日諱貴本紀』の、諸本や書誌の先行研究については、伊藤氏のご研究がある。<sup>①</sup>伊藤氏によると『日諱貴本紀』の伝本について次のように解説されている。

- ①真福寺文庫本↓奥書はなし。『真福寺善本目録』によれば鎌倉時代写。
- ②天理図書館本↓奥書は、永徳元年（一三八一）

永徳元年<sup>辛酉</sup>九月六日於法隆寺学問寺  
西園以堅盤殿御本令筆写之本

相似沙門宗樹（花押）

- ③早稲田大学・教林文庫本↓延宝五年（一六七五）覚  
深写。

- ④内閣文庫本↓寛文九年（一六六九）写。

- ⑤神宮文庫イ本↓奥書なし。

- ⑥神宮文庫ロ本↓奥書なし。

- ⑦彰考館本↓奥書なし。

- ⑧河野雀三記念文庫↓奥書なし。

- ⑨高野山↓未確認。

編者に関しては『日諱貴本紀』の冒頭に「勅詔右大臣王神奉」とあり、「五諱敬礼崇行章」の末尾には、次のように記されている。<sup>2</sup>

延暦十七年「戊寅」九月十八日之今為彼院命司記之

また、『日諱貴本紀』の末尾には、<sup>3</sup>

右大臣從二位王神王 天智天皇三世孫 志貴皇子之孫

履井親王之五男也

とあることから、伊藤氏は、<sup>4</sup>

神王に仮託したもので、本書の成立は南北朝であり、仮託という形式はこの種の神道書においては常套的なものであるが、神王に仮託したものは他に例を見ない。神王に仮託したものとし、詳しい編者は不明であると述べている。しかし、成立時期については、<sup>5</sup>

妙法院藏『（神像絵巻）』（失題による仮題、『妙法院史料』第六巻）に「日諱貴本紀云」として序の全文、次いで第一章「禁疎極伝章」の前半部分の引用がある。同書は奥書に「観応元年庚寅三月十一日賜小野僧正興一御本」とあり、このことにより、『日諱貴本紀』の成立は、観応元年（一二五〇）以前ということになる。

と、伊藤氏は推定している。次に、『日諱貴本紀』の構成についても、同じく伊藤氏によると、<sup>6</sup>

①禁疎極伝章、②鳳祚印明秘伝章、③現相日前章、④在所靈示章、⑤貴現分明章、⑥益術与秘章、⑦朋体座注章、⑧秘中深秘極密章、⑨皇知宜徳章、⑩帝徳行務章、⑪神祠祭文章、⑫祖敬崇霊章、⑬天神明現章、⑭地祇居廟章、⑮人王即位章、⑯政務道直章、⑰五諱敬礼崇行章、⑱奉臣檢越章。

のような一八章から構成されているとする。今回は、この中の①禁疎極伝章と③現相日前章に注目する。また、今回、『大神宮本縁』と『日本記三輪流』を『日諱貴本紀』と比較して論じる。このうち、『大神宮本縁』について伊藤聡氏が、次のように述べておられる。

『日諱貴本紀』は、連綿たる相承を経た秘説の集成ではなく、また特定の人物によって著述されたものでもなく、同時代の複数の神祇書や切紙等を継ぎ合わせ、章名を立てて構成したものである。現在までに典拠が判明しているのは、①、③の一部、④である。先ず①は、『伊勢大事』（神宮文庫・金沢文庫に伝本あり）と

いう独立した切紙としても現存する。

伊藤氏の御論の中の①とは、本論で注目する『日諱貴本紀』の「禁疎極伝章」のことである。また、比較にあげる『大神宮本縁』の一文の章名とおぼしき題名が「伊勢大事」であることから、伊藤氏の指摘されている神道切紙と考えられる為に比較検討する。一方の『日本記三輪流』に関しては題名通り、三輪流に関する目録書であることから、『日諱貴本紀』に見られる思想に三輪流が何らかの影響を与えたのではないかと考え比較検討する。

次に、『日諱貴本紀』の訓に関して山本ひろ子氏の御論をあげておく。<sup>⑧</sup>

「日」には「ナンヂ」「ヨノレ」の訓が与えられている。「日」また「日光」は神の人称代名詞として機能しているのだ。日本国の「貴祖」は「日精ナリ」との序の一文に照応するわけだし、「伊佐字貴尊」の「貴」も意図的な宛字であろう。（中略）クニトコタチノ尊と「界常住尊」。ナンヂと「日」。和語と漢語の軋み・断層がここではイマジネーションの飛距離をあらわしているかのようだ。同時に、特殊な訓みによる言葉の

『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

伝授も、口伝法門の重要な事項であった消息を偲ばせる。

上記のように独特の訓について述べておられる。この訓は、一番古いとされる真福寺蔵『日諱貴本紀』の影印を見る限り、加筆の可能性が高い。訓の加筆以外にも、伊藤氏によると、（真福寺本と天理本以外の）

他本には、先に引いた巻末の「右大臣從二位神王」の付記に書き加えが行われて「聖師 密宗伝 大神宮相伝」血脈図に改竄されていることである。この十五の図像は、元亨年中に度会常良が東西宝殿より再発見したと称するもので『鼻婦書』、「大神宮図相伝」とは、同図相伝を示したものである。これらは明らかに常良によって新たに創造されたものである。これらの図と血脈は、常良自身が関係したのではなからうが、少なくともそのゆかりの者によって、『日諱貴本紀』に挿入されたものと考えられる。真福寺本・天理本以外の本は全て伊勢神宮周辺で書写相伝されたもの、及びその系統を引くと考えられる写本であり、このことは改竄が神宮祠周辺で行われた可能性をより補強する。

と、血脈について、改竄が見受けられると指摘されている。血脈や訓が持つ意味にも大変興味深いのが、本稿では、訓を解釈の参考程度にとどめ、「本文」を中心に考察をすることとする。

加筆や改竄以外にも山本氏は、『日諱貴本紀』の特色について、

中世の神学者たちの多くが夢みた「大日如来の印文」なる聖遺物、元始の海底に眠る、至高者の残した聖なる印章は、中世びとが幻視した創世神話の核であるかのような。なかでも「禁疏極伝章」が伝える「金輪」は、その人格的表象として「金輪王」を誕生させたことで、きわだって個性的である。(中略)

『日諱貴本紀』は、あくまでも「禁疏」——つまり閉ざされた禁書であった。いうなればこの書物自体が一箇の聖なる御物であり、ヒエログリフの集積体なのだ。秘密儀軌としてのテキストの発生、ロゴスの覚醒の試みは、言語の呪術性を奪還していく運動でもあったということができる。

と評価している

本論で取り上げるのは、『日諱貴本紀』の中の「禁疎極伝章」という章であり、この章についても山本ひろ子氏は、次のように述べている。<sup>⑪</sup>

いっそう興味をそそのけるのは、「禁疎極伝章」の場合、「界常住尊」が「金輪王」へと化身している点である。中世にあって国常立尊にはいくつかの異称が与えられているが、「金輪王」とするのはほとんど類を見ない。この「金輪王」から三世を経た、つまり孫ノ治世に、金輪が破れて赤と白の半輪が出現した天神第四代の泥土煮・沙土煮尊が化生したという。中世神話では、天神四、五、六代の二神は、男女一對の対偶神とみなされているが、これら対偶神を生み出す働きすべて「金輪王」に帰されているわけだ。

氏は、界常住尊から「金輪王」への化身は、中世神話においてほとんど類を見ないとしている。『日本書記』において国常立尊は、<sup>⑫</sup>

古に天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其の清陽なる者は、薄靡きて天に為り、重濁なる者は、淹滯りて地に為る

に及びて、清妙の合搏すること易く、重濁の凝滞すること難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に神聖其の中に生れり。

故曰く、開闢の初めに、洲壤の浮漂へること、譬へば游魚の水上に浮かべるが猶し。時に天地の中に一物生れり。状葦牙の如く、便ち神に化なる。国常立尊と号す。至貴を尊と曰ひ、自余を命と曰ふ。並に美拳等と訓む。下皆此に倣へ。次に国狭槌尊。次に豊斟淳尊。凡て三神なり。所以に此の純男を成すといふ。

(傍線部稿者以降同じ)

と、傍線部に記されるように国狭槌尊・豊斟淳尊と共に、純男であると記されている。

金輪王ではないが、似たような記述をしているものに、『溪嵐拾葉集』巻第一七「金輪法事」をあげておく。

我國劫初ニ大海最底ニ大日ノ印文有、其相如何示云。

此事神道ノ大事最極ノ秘事也。無ニ左右ノ不レ可ニ口外ノ所謂ル其印ト者三輪ノ金光也。國常立尊天宮御座ノ天ノ銚下ノ此下ニ國アカラメヤト云テ大海最底ノ深リ給シ時。金ノ三輪即山王也。故ニ山王金輪一體ト習也。

『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

此三輪ハ即ハ密教ニ三部也。故ニ大日ノ印文口傳口云云  
右記の記述は、国常立尊が天銚で大海を探ると金の三輪が見つかった話であるが、『日諱貴本紀』では、国常立尊が金輪王へと成る。この『溪嵐拾葉集』の記事について山本ひろ子氏は、

銚が探りあてた「金の三輪」には、かかる金輪王と金輪のイメージが投影しているのだ。

と述べている。『日諱貴本紀』と『溪嵐拾葉集』とでは設定は異なるが、両者とも国常立尊と金輪王の關係を示唆するものではないかと考えるが、本論では国常立尊（金輪王）と天照大神の二神が両性具有でありながら異なる性格を有している問題を中心に触れたい。

天照大神の両性具有に関しては、『日諱貴本紀』の次の「現相日前章」の傍線部に、「二根共に男女を具え、是今の両始也」という一文で表現されている。

或説云、其形三面六臂六足青黒ノ有レ尾如レ龍三之神類如ニ色□ニ諸根具足尤根□者□端嚴ノ身帶光明勝空自在飲食自然ノ飽足豐穰ノ長壽百千歳云云  
国常立尊 不知体相、虫者雲遊神、是故号秋津嶋

神心大道果得也、鳥者金三立師、馬鳥

貧者、海月自在而寶三尺六寸玉

(中略)

天照太神 玉面光曜而身色黃光也、身量六尺六寸、

心

神賢聖直和也、言語無誕詐、具二根共男  
女、是今之兩甥始也、天璽習在之

このように肉体的に両性具有であることを説く例は珍しい。  
この記事によると、両性具有性は天照大神のこのみを伝  
えており、金輪王（国常立尊）については触れられていな  
い。

しかし、金輪王から三代後に、金輪が破れて理と智にな  
り、イザナキとイザナミが成ることと、そもそも国常立尊  
が理と智を受けて金輪王と成ることから考えて、金輪王も  
両性具有の性格を有していると考えられる。この天照大神  
と金輪王（国常立尊）との両性具有性に対する認識の差異  
は、単なる地の代表が国常立尊で、天の代表が天照大神と  
いうことだけではなく、中世期において愛染明王（金輪王  
と同体視されている）が如何に捉えられていたのかを知る

手懸かりになると考えた。

以下の論述は、一、両性具有と神、二、愛染明王信仰に  
ついて、三、『日譚貴本紀』における愛染明王の順に展開  
する。

## 一、両性具有と神

本章では、本稿の題名にもしている『両性具有』とはい  
かなるもので、どう捉えられていたのかを検証し、日本中  
世期における神の性別について考察する。

『両性具有』という概念は、西洋・東洋を問わず存在す  
る。勿論、日本の『病草紙』にも登場する。

なかころみやこにつゝみをくひに かけてうらしあり  
く男ありかたち おことなれとも女のすかたにしたる  
こともありけり人これをおほつかなかりて よるねい  
りたるにひそかにきぬをかきあけてきければ男女の根  
もとにありけりこれ二形のものなり

傍線部の『二形』と呼ばれるものがそれである。しかし、  
『病草紙』に描かれていることからわかるように、神と

同じように考えるには程遠い認識である。しかし、日本中世期において、『両性具有』が神とも病とも同じ認識であるということこそが、『両性具有』のもつ特異性かも知れないが、今回は、神における性に関して西洋思想を踏まえて考察することとする。

西洋思想における『両性具有』に関しては、プラトンが有名である。プラトンは『饗宴』<sup>16</sup>で、

まず第一に諸君が知って置かねばならぬことは、人間の本性（フシス原形）とその経歴である。実際原始時代におけるわれわれの本性は、現実と同様なものではなく、まったく違っていた。第一に、人間の性には三種あった、すなわち現在のごとくだ男女の両性だけではなく、さらに第三のものが、両者の結合せるものが、在ったのである。そうしてその名称は今なお残っているが、それ自身はすでに消滅してしまった。すなわち当時男女といつて、形態から見ても名称から見ても男女の両性を結合した一つの性があったのである。けれども今はただその名称が罵倒の言葉として残っているに過ぎん。

『日譚貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

と両性具有を第三の性と捉えており、元々人間世界に存在した性という認識である。次に、ミルチャー・エリアードによると、次のように述べられる。<sup>17</sup>

地上のアダムは天上の原型の一イメージにすぎなかった。彼も両性具有であった。人類がアダムの後裔であるという事実によって、男・女は潜在的に人間誰にでも存在し、精神的完成はまさしく、自己自身の中にこの両性具有を回復することにあるのである。最高「精神」たるロゴスも、等しく両性具有であった。そして、「動物的、物質的・物質的・真実のみならず精神的・真実の最終的統合は、一人の人間、マリアの子イエスにおいて実現される。」（『全異端反駁論』）

これは、キリスト教における神についてであるが、天照大神にもいえるのではないだろうか。それは、先ほど「はじめに」に引用した『日本書紀』の一文に、<sup>18</sup>

次に神有り。泥土<sup>うひちのみにこと</sup>糞尊<sup>すひに</sup>泥土、此には須<sup>うひち</sup>毘<sup>ひ</sup>尼<sup>に</sup>と云ふ。・沙土<sup>さつち</sup>糞尊<sup>すひに</sup>。沙土、此には須<sup>うひち</sup>毘<sup>ひ</sup>尼<sup>に</sup>と云ふ。は泥土<sup>うひちのみにこと</sup>根尊<sup>ねに</sup>・沙土<sup>さつち</sup>根尊<sup>ねに</sup>と曰す。次に神有り。大戸<sup>おほと</sup>之道尊<sup>のちのみにこと</sup>一に云はく、大戸<sup>おほと</sup>之<sup>の</sup>辺<sup>へ</sup>といふ。  
・大<sup>おほと</sup>苦<sup>く</sup>辺尊<sup>へに</sup>。亦は<sup>おほと</sup>大<sup>だい</sup>戸<sup>こ</sup>摩<sup>ま</sup>彦尊<sup>ひこ</sup>・大<sup>おほと</sup>戸<sup>こ</sup>摩<sup>ま</sup>姫尊<sup>ひめ</sup>と日し、亦は<sup>おほと</sup>大<sup>だい</sup>富<sup>ふ</sup>

道尊・大富辺尊と曰す。次に神有り。面足尊・惶根尊。

亦は吾屋惶根尊と曰し、亦は忌櫛城尊と曰し、亦は青櫛城根尊と

曰し、亦是吾屋樞城尊と曰す。あやかしかのみこと  
次に神有り。伊奘諾尊・伊いさな

なみのみこと  
柴冉尊。(中略)

凡て八神なり。乾坤の道、相参りて化る。所以に、

此の男女を成す。国常立尊より、伊奘諾尊・伊

是をこ伸かむ世よ七な代なと謂いふ。

元々、同一のものが、次第こ二つに分か

本格的に完全な男女であるイザナキ・イザナミとなる。

肉体的に完全な男女の結合により誕生した天照大神が

内、依歸に完全な男女の結合により誕生した天照大神が

有であるといふことは、イサナキ・イサナミの二相

でも精神的完成という観点に立てば、両性具有と老え

また、動物・物質のみならず精神的・眞実の最

として天照大神という存在を認識できなかったろうか。

「デは、

ある女神について男女両性的であるということは、そ

女神が絶対的存在であり、究極的なリアリティであ

というのと等しい。

述べている。つまり、『日諱貴本紀』において、精神

的にではなく「二根共に具え」とは、『病草紙』に見るよ

うな異形な形容にも関わらず、エリアーデが主張するよう

な“究極的なリアリティ”を生み出すものと考えられる。

また丸山真男は、『日本書記』の表現について次のように

述べている。<sup>(20)</sup>

オノゴロ島自体は、二神が引き上げた矛の末<sup>さき</sup>からし

たたり落ちた塩の累積して「成」ったものであって、

二神「非、所、生、一ざることを後段で、やはりわざわざ

訓主してことわっている。つまり編者はナッして「な

る一と「うむ」上の実質的相違を無頭着であったわけ

ではない。むしろそれを承田のうきで「国主み」を

ではない。むしろそれを厚知の云へて「国生み」を

「なにないで なに余ねる処」と「なにないでなに合

にさる處」との交接の結果として描いている点が大事件

なのである。これは一神の出現に先立って、おもたる

の神（紀）表記では面足尊）が置かれているところ

からも察せられるように、顔面をはじめ人間の身体の

各部が「成」ってゆく過程の結果として両性のちがい

が出来たという発想であり、その同一線の延長のうえ

に、ただ新しい段階として、性交による「生み」の行

為へと説話は移行する。同じく「うむ」の論理にしても、陽と陰との二元的な対立の結合による万物の発生、ないしは目的意識的な化育という中国的な発想——（以下省略）

つまり、国常立尊（金輪王）と天照大神との両性具有の差異は、完全な男女の肉体から「誕生した」天照大神と「成った」国常立尊（金輪王）の違いと考えられるのではないだろうか。天照大神の性別については他にも『日本記——神代卷取意文』に、

（天照）太神宣ク、我父母（二）宿シ已前ハ陽神也。地ニ下リ、無明ノ衆生ヲ濟度ノ為（二）、慈悲ノ形ヲ以テ、母ニ宿法ノ乳房ヲ諸ノ衆生ニ与エンカ為ニ、土ニ同シ、人ニ同シ、慈悲ノ形ヲ以テ、今陰神也。（中略）又、吾ヲ偏ニ女神ト思事ナカレ。火大、風大ノ姓ハ日輪也。地大・水大ノ姓ハ月輪也。草木ノ姓ハ諸星タリ。或ハ、陽神トシテ男ニ変、或ハ陰神トシテ女ニ変ス。

傍線部「或ハ、陽神トシテ男ニ変、或ハ陰神トシテ女ニ変ス」と両性具有の性格が記されている。このような神の両性

『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

具有の性格は、謡曲『三輪』にも見ることが出来る。そもも日本中世における神の性別について田中貴子氏が、

中世ではしばしば天照太神の性別が混乱、もしくは曖昧になる場合が見られるのである。（中略）『記紀』でも女性神としての性格付け（いわば文化的な意味づけを持つ神の性別）はそれほど強固でないように思えるが、かといって男神や性別を持たない神と明記されることはない。だが、鎌倉時代の密教的神道の影響を多分に受けて成立した和歌注釈や『日本書紀』注釈では、天照太神の性別が問題にされ、ときに男神としか考えられない記述をしている資料もある。（中略）天照太神にとって性別は自在に変化するものだという説も見受けられるので、天照太神の性別は男女のどちらと決めることの出来ないニュートラルなとらえかたをされていると考えられる。

傍線部「天照太神の性別は男女のどちらと決めることの出来ないニュートラルなとらえかたをされていると考えられる」と述べているように、中世期の認識として天照大神は男神でありながら女神であった。しかし、『日諱貴本紀』

以外で見る両性具有の性格を有した神は精神的な両性具有性を醸し出しているが、『日諱貴本紀』の天照大神は、肉体的に両性具有であることが特記されている。

それでは、天照大神と同じく両性具有の性格を有していながら両性具有とは認識されていない金輪王について次章で考察したい。

二、愛染明王信仰について

イザナキ・イザナミが譲り受けた島に住んでいた金輪王の容貌は、次にあげた表『日諱貴本紀』の「禁疏極伝章」に記されている。(表には、『日諱貴本紀』「禁疏極伝章」と、「禁疏極伝章」の類話を載せている。類話とは、南北朝時代頃に成立した『大神宮本縁』、天文一七年(一五七九)の書写奥書をもつ『日本記三輪流』の二つである。ま

| 『日諱貴本紀』                                                                                                       | 『大神宮本縁』                                                                    | 『日本記三輪流』                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| <p>アツチケ 天地未レ開、父母未レ生<br/>心ミタマヒトリタル<br/>□王獨照。然在自性。是謂二七代之最源一。<br/>／<br/>クニトコタチノミコト 界常住尊、有リ二諸化二法一。開成レリ二金輪王ト一。</p> | <p>口云天地不開父母不生也往心王獨在法性經<br/>七尾口云一クニトコタチミコト 日輪十一面大日<br/>七代芽七代國常住尊有理智二法開成</p> | <p>天地不開、父母不生之。往心經、独有法性二。經七星、第七代國常立尊、有リ二理智二法一。開成レリ二金輪ト一。</p> |

天地が未だ開闢しておらず、父母も生まれていなかった頃、自性があり、(物それ自体の本性・本来の性質) 心王独り輝いていた。これを、七代『日本書紀』によると、国常立尊、国狭槌尊、豊斟滯尊、ヒチニノ尊・スヒチニノ尊、大戸之道尊・大苦邊尊、面足尊・惶根尊、伊弉諾尊・伊弉冉尊の始めという。国常立尊は、理と智の二法により現れて見えて金輪王となった。

三世既ニ成就然ニ後輪破、成赤白二半輪。破萬事一物之半。復有有理神一。名涅婁尊。亦有智神一。涅婁尊。四後田滿、陰陽想應以、名伊佐那尊。

トコスエニ日十一面大日伊金〇々破成赤白二ノ半〇半復有理神名伊佐那貴半復有智神号伊佐那。

輪破赤白半輪ト。半復、有理神一。名伊佐那男貴ト。半復、有智神。号ス伊佐那女躬ト。

金輪王は三代後に完成の域に達し、ことに後ろの輪が破れ、赤白二つの輪となる。半分は理神で、名はスヒチニノ尊。また、智神があり、名はウヒニチノ尊。ウヒチニノ尊・スヒチニノ尊から四代後に陰神・陽神に分かれイザナキ・イザナミと名付く。

此二柱ノ神、於空渡橋名天八葉橋ト々ノ上ニシテ天玉鉦指下ノ大海腹ヲクルニ有五角ナル嶋二柱神誓見嶋ヲ一面六臂赤色咲怒之王。

此二柱ノ神、於空渡橋、名天ノ八葉橋ト。於橋上、天鉦ヲ指下シテ、夫海原搜ルニ、有五角ナル嶋。二柱、暫見ニ此ノ嶋ヲ、成日輪ト。即、照玉ヲ嶋ヲ、在リ三面六臂赤色咲怒之王。

斯二柱成ヲ。名天葉ノ橋。天玉鉦降、見大界底、有二五角嶋。二ノ柱神、誓務此嶋ヲ、成二日輪。即、照玉ヲ直戴此嶋ヲ、一面六臂赤色咲怒之王成。

その二柱架け橋と成るを天葉橋と名付く。天玉釵をさし降ろし、大海の底を見ると、五角の嶋があった。二の柱神は此の嶋を治めることを誓ひ、日輪と成つて、この嶋を照らし、直ちに此の嶋を頂いた。嶋には一面六臂の赤色で微笑みと怒りをたたえた王がいた。

二神皆同<sup>ヒトシクス</sup>三身和一之精源。二／神問<sup>チ云</sup>汝<sup>ニ</sup>誰<sup>ニ</sup>乎。王云、日は金輪王也。二神答、

自無／始以来、受<sup>テ</sup>生<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>前後<sup>ミケ</sup>三昧<sup>ヲ</sup>、住<sup>ミ</sup>斯<sup>ニ</sup>金輪宮<sup>ニ</sup>。

□神問云汝誰人<sup>ツ</sup>乎王云我是金輪王也自無始以来入愛生染死三昧<sup>ニ</sup>住此金<sup>〇</sup>ニ云々二神云願汝讀此嶋於我<sup>ニ</sup>等給<sup>ハ</sup>

神問云。汝誰人<sup>字</sup>乎。王答。我是、金輪王也。從<sup>ニ</sup>无始<sup>ニ</sup>已来、入<sup>ニ</sup>愛生染死<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>三昧<sup>ニ</sup>、住<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>金輪<sup>ニ</sup>。一神云。願汝、讀<sup>ニ</sup>此嶋<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>王云々

二神と一面六臂の王は、皆同じである。つまり、三身和一の精源である。(三身とは、男女と両性具有と捉え、それらが一つになることにより生命の根源であることを説いているのではないかと考える。)二神が「汝は誰か」と問うと、王は「金輪王である。無始よりこのかた、生死前後の三昧を受けて、金輪宮に住んでいる。」

伊弉諾<sup>イサノ</sup>伊弉冉<sup>イサハ</sup>神<sup>カミ</sup>今<sup>イマ</sup>、／出<sup>デ</sup>愛生門<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>二五<sup>ニ</sup>智<sup>ニ</sup>釵<sup>ニ</sup>、受<sup>テ</sup>二汝尊<sup>ニ</sup>。又<sup>タ</sup>以<sup>テ</sup>二斯<sup>ニ</sup>ノ島<sup>ニ</sup>、禪<sup>ニ</sup>二日<sup>ニ</sup>／光<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>二此嶋<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>産<sup>ニ</sup>開<sup>ニ</sup>太<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>、覺<sup>ニ</sup>二心<sup>ニ</sup>暗<sup>ニ</sup>一。

王云我今出愛生門故以五智釵<sup>ヲ</sup>召汝等<sup>ヲ</sup>以我此嶋讓汝等願汝等<sup>ヲ</sup>於此嶋廣<sup>ク</sup>開<sup>ク</sup>太神道弘佛<sup>ヲ</sup>法道給<sup>ヘト</sup>云々

王云。我今出<sup>ニ</sup>愛生<sup>ノ</sup>門<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>二五<sup>ニ</sup>智<sup>ノ</sup>釵<sup>ヲ</sup>、召<sup>ニ</sup>汝等<sup>ヲ</sup>。我、以此嶋<sup>ヲ</sup>、讓<sup>ニ</sup>汝等<sup>ニ</sup>。願<sup>ハ</sup>汝等、於此嶋<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>広<sup>ク</sup>開<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>大神通<sup>ヲ</sup>一。弘<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>仏法<sup>ノ</sup>正路<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>王云。

イザナキ・イザナミは、愛生門を出たので、金輪王は「汝尊に、五智の釵を授けよう。また、此嶋を日光に譲る。日光は、此嶋において神道を産み育て、広め、核なる秘密をさとりなさい。」

|  |                                                                                                                                       |                                                                         |
|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
|  | <p>二神即誓云君<small>武</small>／我誓願大悲中一人不成二世<br/>願我墮虛妄罪中不還本覺捨大悲云々王聞此<br/>誓言讓授□瓶昇天ニ</p>                                                      | <p>二柱ノ神、誓云。若我誓願大悲中一人不<br/>成二世願我墮虛妄罪科中不還本覺捨大悲王、<br/>聞此誓言、讓授宝瓶、昇ヘリ天ニ。</p> |
|  | <p>二神請取瓶重誓□我者成王治國汝者示臣<br/>イサナキ・イザナミ<br/>□畢云々上□說云□勢太神有日○十一面<br/>觀音也□迹三足金色鳥也云々口云奧沙深秘<br/>尊日○十一面蓮華葉下有宝瓶々々觀音躰也<br/>□云□勢社下ニ有宝瓶或宝塔十□丈云々</p> | <p>二神、請取瓶、言誓云。我者成王治國汝<br/>者示臣政事。<br/><small>天照</small></p>              |

た、『日諱貴本紀』「禁疏極伝章」のみ、要約を掲載してい

るが、意味のわかりにくいところが多く、不十分な訳となっ  
ている。また、引用に関して、返り点など欠落している部  
分もあるが、原本通り付している。それぞれの神話内の編  
みかけは、他本には見られない箇所である。<sup>23)</sup>

比較表の傍線部Bに、「一面六辟赤色咲怒之王成」とあ  
るのが、金輪王の容貌を記した一文である。これについて

『神像絵巻』には、<sup>24)</sup>

一面六辟赤色尊習愛染王亦如意輪習之□□大染敬愛万

『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

# 物霊躰也

とある。つまり、金輪王は愛染明王であることが容易に理  
解出来る。また、金輪王の両性具有性については、『日諱  
貴本紀』において金輪王は国常立尊が理と智の二法によっ  
て成ったことが記されている。また、イザナキ・イザナミ  
の二神に関しては、後ろの輪（金輪と考えられる）が破れ  
て赤白二つの輪となり、理神と智神となりイザナキ・イザ  
ナミという肉体的に完成された男女と「成る」。つまり、  
この男女の性格を共に有しており二神が派生したと思しき

金輪王は当然、両性具有的性格を併せ持っていたと考えられる。その為に、後に傍線部C「三身和一之精源」とあるが、これはプラトンのように男（イザナキ）・女（イザナミ）・両性具有（金輪王）と第一・第二・第三の性と考えられる。すると、二神が、後ろの輪から成ったのも理解出来る。しかし何故、愛染明王が登場する必要があったのであろうか。それを本章では探るべく、中世期における愛染明王信仰について考察する。

愛染明王は院政期より修法の仏として盛んに信仰されるようになる。『阿婆縛抄』巻一一五「愛染法」によると、

此法以<sub>二</sub>東寺<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>本事。聊有<sub>二</sub>其故<sub>一</sub>。憚尤多。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>外聞<sub>一</sub>。後冷泉院御時。後三条院東宮御坐之時。小野成尊僧都東宮ノ御持僧ヲ御前ニ祇候之時。東宮御髮梳御之間。御白髮一筋梳落<sub>クル</sub>。御覽<sub>レ</sub>。成尊ニ如何<sub>ニスル</sub>。祈ソ是見<sub>ヨト</sub>被<sub>レ</sub>仰。有<sub>二</sub>御落涙氣<sub>一</sub>。成尊見<sub>二</sub>此御氣色<sub>一</sub>。日来不<sub>二</sub>存知<sub>一</sub>候。只任<sub>二</sub>御運<sub>一</sub>罷過候畢。然者賜<sub>二</sub>身暇<sub>一</sub>殊可<sub>二</sub>祈請<sub>一</sub>之由申。入<sub>二</sub>籠本寺<sub>一</sub>。愛染王七箇日奉供之間。後冷泉院御惱無<sub>レ</sub>程崩御。東宮令<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>給了。但御在位不<sub>レ</sub>幾。然而如<sub>二</sub>御本意<sub>一</sub>成就<sub>云々</sub>。

愛染明王の修法は専ら東寺が修しており、古い事例としては、後三条院が東宮の折に成尊が愛染修法を修した結果、後三条院が天皇の座に着くことが出来たことを記している。同じく修法の仏としての性格を有しながら、後三条天皇の折りとは異なる性格を見せ始めるのが、覚禪（一一四三）  
一一一三『覺禪鈔』『愛染上』の、

傳聞諸佛本誓區分。菩薩悲願不<sub>レ</sub>同。敬愛息災之利益皆具<sub>ス</sub>。滅罪、招福之功徳同<sub>ル</sub>。備<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>然殊<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>夫婦之乘違<sub>一</sub>。致<sub>ハ</sub>男女之敬愛<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>勝<sub>ル</sub>。愛染明王之悲願<sub>一</sub>。仍殊<sub>ニ</sub>致<sub>レ</sub>信心<sub>一</sub>。自來八日七箇日之間。率<sub>二</sub>六口之伴侶<sub>一</sub>。勤<sub>レ</sub>修件法<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>祈<sub>レ</sub>請悉地成就之由<sub>一</sub>。依<sub>二</sub>三位殿仰<sub>一</sub>。執達如<sub>レ</sub>件。

傍線部「男女の敬愛を至るは、愛染明王の悲願に勝ること無し」という一文で明らかである。そして、性心『瑜祇經秘要決』には、次のように記される。

染愛王<sub>定也男也</sub>（梵字）表<sub>三</sub>示<sub>二</sub>二方五股杵<sub>一</sub>。愛染王<sub>定也女也</sub>（梵字）二方五股文此記<sub>ノ</sub>意、染愛愛染是<sub>レ</sub>一體異名<sub>ニ</sub>。つまり、染愛王（男）も愛染王（女）も一体の異名で、同体であることが記されている。これは、愛染明王に関する

經典である『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』に關係している。  
『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』には、「一切如來金剛最勝王  
義利堅固染愛王心品第二」と「愛染王品第五」があり、こ  
れが愛染明王の二元性を高めるのに一役買ったと考えられ  
る。松長有慶氏は、『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』につい  
て、  
 上下二卷に分かれる場合は、序品第一より一切如來大  
 勝金剛頂最勝真実大三昧耶品第八までが上巻で、金剛  
 吉祥大成就品第九より、大金剛焰口降伏一切摩怨品第  
 十二までが下巻に配せられている。胎藏的な色彩の濃  
 い第九品が下巻の冒頭に配せられていることは、偶然  
 かもしれない。しかし本経がわが国において、金胎兩  
 部に通ずる經典として尊崇された歴史をもつことを考  
 えあわせれば、興味深いことである。

と『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』そのものが金胎兩部を併  
 せ持つ存在として捉えることが出来るのではないかと述べて  
 いる。愛染明王の二元性を記すものは他にも多く、成賢  
 (一一六二)・一二三二)『纂元面授』に、

夫胎金冥然各住<sup>シ</sup>自証<sup>ニ</sup>、更<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>趣<sup>ニ</sup>向大智大悲

『日誦貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性



図1 『諸尊図像』二頭愛染王

門ニ、是陰陽ノ本初法爾ノ道理也。(中略)理智冥合赤

〈ア〉白〈バン〉混和ソ魂〈ウン〉識托ソレ中ニ所生不<sup>ナルヲ</sup>

名<sup>二</sup>大<sup>二</sup>一<sup>一</sup>、両軀不存全一非<sup>ニ</sup>ナリ。(中略)理趣釈

云、由<sup>ニ</sup>瑜伽法ノ中ニ依<sup>テ</sup>ニ一念淨心相応スルニ便チ証スニ真

如實際<sup>ヲ</sup>一文。由<sup>ニ</sup>瑜伽法中者理智父母ノ二根交会和合相

応<sup>スルナリ</sup>。

傍線部①「理智冥合、赤白混和して魂中に識托して所生不

二なるを大ニと名く」や傍線部②「理智父母の二根交会和

合相應するなり」と「赤・白」や「父・母」、「理・智」に

準えて考えられている。「理・智」や「父・母」は『日諱

貴本紀』に記される、イザナキ・イザナミの二神に見られ

る特性と似ている。一方、「赤・白」に関しては『諸尊図

像』に図1のような図が存在し、この図の様な愛染明王に

ついて覚禪の『覚禪鈔』によると、

有説云。表<sup>スル</sup>ニ兩頭愛染王<sup>ニ</sup>也。其像右面白色。左面赤

色。手<sup>ニ</sup>持<sup>ニ</sup>五鉈杵<sup>ヲ</sup>一<sup>云云</sup>

右面が白色で、左面が赤色の像を「両頭愛染」と呼ぶこと

が記されており、『諸尊図像』の像は、図内に書かれてい

るように「二頭愛染」または、『覚禪鈔』に記される「両

頭愛染」と考えられる。また、『日諱貴本紀』との関係が  
示唆されている『日本記三輪流』二重八「聞書口決也」に  
は、

此国<sup>ヲ</sup>藤浪ノ里ト云事ノ根元、伊勢ノ国也。藤ノ中<sup>ヨリ</sup>葦<sup>ヲ</sup>生

出<sup>テ</sup>タリシカハ、藤ノ高<sup>ク</sup>生タリシ故、サテ藤原ト云也。

実ニハ藤也。故ニ藤浪ノ里ト云。是ハ何ノ用ソト尋ヌルニ、

此国ハ敬愛成就ノ国也。今ノ藤ハ、本、愛染也。葦原<sup>ヲ</sup>秘<sup>ス</sup>

ルニアラズ。ナゾラヘテ藤浪ノ里ト云ハ、ヒ藏也。夫、何

ナレハ男女和合<sup>シテ</sup>草木<sup>ヲ</sup>生長サセセントスル故、カツ

ラハ女ニヨセ、一切ノ情ヲ結ヒ合ハセン為也。藤ヲハ男ニヨ

セテ、情ヲタハネントナリ。是ニツ有。一ニハ此方<sup>コナタ</sup>ノ谷<sup>ヲ</sup>

カナ彼谷<sup>コナタ</sup>ノ谷ニハイ渡<sup>ル</sup>ヲ云也。左右ハイ合タル、クズカ

ズラ云也。以テ之、可シレ作<sup>ニ</sup>愛染<sup>ヲ</sup>一。々々ニモ持秘ノ愛

染ヲ勝レタリトス。持秘ニモ二ツ有リ。即チ、男持秘ノ愛染ト

申也。惣チ我等ハ両部和合スル時ヲ、超過大日、両頭ノ

愛 申也。父ノ淫ハ金、母ノ淫ハ胎。此二和合スレト

モ、男モ有リ女モ有リ。故ニ、両部ハ男女也。サレハ、交会

セルト云時ヲ超過尊・両 尊ト申也。故ニ我等ニ尊也。

藤ノ愛染ト習事、能々深秘ノ深愛々々可秘々々。葦ハ大日

如來。口云。我身<sup>ヲ</sup>愛染<sup>ト</sup>習事、不<sup>レ</sup>秘之<sup>一</sup>。峯<sup>ニ</sup>ハエル  
玉カツラ、白雲木ノ事也。師<sup>ノ</sup>云<sup>ニ</sup>伝<sup>フ</sup>書<sup>ニ</sup>、於<sup>テ</sup>ハレ之<sup>ノ</sup>輕<sup>ク</sup>、  
不可他見。可<sup>レ</sup>秘々々々<sup>タ</sup>

と、傍線部「持秘にも二つ有り。即ち、男持秘の愛染と申す也。惣て我らは両部和合する時を、大日超過し、両頭の愛染と申す也。父の淫は金、母の淫は胎。此二和合すれども、男も有り女も有り、故に、両部は男女也」と記されている。これは、愛染明王の特性を記すだけではなく、両頭愛染が大日如來と同一視されていたことが容易に読み取れる。二元性を持った愛染明王が、大日如來の代わりにイザナキ・イザナミの二神に五智の劍を渡し國を譲るといふ『日諱貴本紀』の一連の流れは異質である。

無住『沙石集』卷第一ノ一「太神宮の御事」では、

去し弘長季中に、太神宮へ詣で侍りしに、ある神官の語りしは、「当社には三宝の御名を言はず、御殿近くは僧なれども詣でざる事は、昔この國いまだなかりける時、大海の底に大日の印文ありけるによりて、大神宮御銚さしくだして探り給ひける。その銚の滴り、露の如くなりける時、第六天の魔王遙かに見て、『この

『日諱貴本紀』の國譲り神話に見る天照大神の両性具有性

滴り國と成りて、仏法流布し、人、生死を出つべき相あり』とて、失はんために下りけるを、大神宮、魔王にあひて、『我三宝の名を言はじ、身にも近づけじ。とくとく帰り上り給へ』とこしらへ仰せられければ、返りにけり。

その御約束を違へじとて、僧なむど御殿近く参らず、社壇にしては經をばあらはには持たず。三宝の名をも正しく言わず。仏をばたちすくみ、經をば染め紙、堂をばこりたきなむと言ひて、外には仏法をうとき事にし、内には三宝を守り給ふことにて御座す。故に我が國の仏法は偏に大神宮の御方便によれり。

のような天照大神と第六天魔王の約諾神話が描かれており、大日如來の印文を天照大神が見つけるという構図になっている。それに比べて、先程も記したように『日諱貴本紀』などでは、天照大神でも大日如來でもなく、愛染明王が登場する。これは、『沙石集』と同じ中世期に造られたものでありながら、わざわざ愛染明王に大役を任せる神話を作成するということは、中世期における愛染明王の存在意義を表すものではなからうか。

この大日如來と愛染明王の關係を具現化したものが、東大寺と西大寺という空間ではないかと考える。<sup>34)</sup>東大寺は、鎌倉期に重源により再建されたが、その際に大仏殿内に「兩界堂」が造営される。これは、創建時の大仏殿内には見られないものであり、大仏も華嚴教主としてではなく大日如來として捉えられていたものである。一方、西大寺には、重源が意識していたとは考えないが、叡尊が愛染明王を安置する。叡尊の弟子である忍性が重源から続く東大寺勸進職に任命されていることから、東大寺の大日如來を意識し、西大寺に愛染明王を安置したのではなかろうか。つまり、ミクロコスモスが東大寺の「兩界堂」であり、マクロコスモスが東大寺・西大寺という存在ではないかと考えたのである。そう考えると、中世神話において愛染明王が、五智の劍をイザナキ・イザナミの二神に授けるのも理解が出来る。

また、両性を併せ持つ存在としても愛染明王は適任だったのではなかろうか。それは、先ほど取り上げた史料にも見ることが出来る「陰陽・父母(男女)・赤白・理智」を愛染明王が具えていることである。これらを具えている愛

染明王(金輪王)の後ろの輪が破れることにより、赤白二つの輪となりイザナキ(理・陽)、イザナミ(智・陰)と成り得たのではないかと考える。

次に、『日諱貴本紀』で愛染明王が如何に描かれているのか、『大神宮本縁』や『日本記三輪流』と比較しながら検討したい。

### 三、『日諱貴本紀』における愛染明王

『日諱貴本紀』と『大神宮本縁』・『日本記三輪流』が類話を載せていることについては既に触れたが、『日諱貴本紀』と『大神宮本縁』・『日本記三輪流』で大きく違う点がある。それは、「愛生門」を出る対象である。『日諱貴本紀』は、イザナキ・イザナミの二神であるが、『大神宮本縁』や『日本記三輪流』では、金輪王が「愛生門」から出たことになっている。

再び、比較表の傍線部Aを参照して頂きたい。先程も簡単に触れたが、後輪が破れたことになっているという点と、傍線部C「三身和一之精源」と波線部「生死前後三昧」に

ついでに考察をしておきたい。そもそも、金輪王は、「生死前後三昧」を受けて金輪宮に住んでいるのである。つまり、生が前輪で死が後輪とは考えられないだろうか。すると、「愛生門」を反対側から見た「染死門」が存在しても不思議ではないのではないだろうか。『古事記』によると、伊弉那岐命の詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。是を以て、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ。

と記されている。『日本書紀』には見られない記述である。『日諱貴本紀』は『日本書紀』を基本にして制作されているが、『日諱貴本紀』の最後に「四部神書」として、『古事記』の名前があげられていることから『古事記』も重要視されていたことがわかる。この記述について神野志隆光氏は、次のように述べておられる。

人がより多く生まれ、より少なく死ぬことの謂れである。人間の死の起源の神話といってもよい。

つまり、イザナキ・イザナミの二神と生・死が関係あるならば、「愛生門」の反対には「染死門」があったというこ

『日諱貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

とも彼らを登場させる所以ではなからうか。

そう考えた時、『大神宮本縁』や『日本記三輪流』のよりに金輪王が「愛生門」を出るよりも『日諱貴本紀』の訓を参考にとすると、イザナキ・イザナミが「愛生門」を出た方が説明がつくのである。もし、金輪王が、「愛生門」から出てこられると、死↓生に出てきたことになり、二神は生↓死に、日本は黄泉の国に誕生してしまうことになりかねない。

また、三身和一の精源とは、金輪王・イザナキ・イザナミの三身であり（男・女・両性具有）これらが一つになることにより、国を治めることになる。先ほど、「愛生門」の対象について触れたが、傍線部Dイザナキ・イザナミが「愛生門」から出たとすると死↓生に出たことにも繋がる。もしくは、この時初めて二神が生を受けたとも解釈できる。しかし、二神が「愛生門」を出たとする『日諱貴本紀』通り解釈すると、金輪王の消息が不明となる。本文内で、金輪王のその後については記されていないが、『湊風拾葉集』巻第二十一に、

第六平等王事 小野口云。平等王者愛染王也。昨摘积

咄惹真言是也。委曲<sup>レ</sup>地藏問法身讚可<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之。不空譯尋云。以<sup>二</sup>愛染王<sup>一</sup>

名<sup>二</sup>平等王<sup>一</sup>所見證據如何 般若寺僧正相續云。愛染薩變<sup>レ</sup>成閻王<sup>一</sup>。(中略) 寬空右口傳。愛染王法次<sup>二</sup>在<sup>レ</sup>之。二尊可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>平等王<sup>一</sup>名也 御抄云。平等王炎魔王<sup>一</sup>名也。秘密

傍線部「愛染明王次に之在り。二尊平等王の名有可也。御抄云、平等王炎魔王の名也」という一文がある。これにより、愛染明王に平等王という異名が存在したことが見て取れる。このことに關して、村山修一氏は、三輪明神に造られた平等寺との關係から、<sup>(38)</sup>

平等王は愛染明王の異名であり、閻魔王の化現とされる。その意味から平等寺における愛染堂の存在は重要であり、愛染明王のごときもはやく三輪別所にまつられたものでなかったか。

と述べている。三輪流に關しての思想としても興味深いが、本稿では興味深い程度にとどめておく。

愛染明王の別名に、平等王(閻魔王)と同体視する思想が存在したことから、金輪王(愛染明王)を死の世界を司

る王とし、生の世界はイザナキ・イザナミより将来的に天照大神が治めるという二つの異なる両性具有性によって世界が統括されているのではないかと考える。つまり、「愛生門」は「染死門」と表裏一体なのではないかと考えるのである。それこそが、愛染明王が持つ二元性でもあり、金輪王が「生死前後三昧」を受けて金輪宮に住んでいた所以ではなからうか。(他の二神話では「愛生染死三昧」生も死も司る王から二神は生を受け持ったのである。

それを物語るかのように、はじめ「日」は金輪王自身のことを表していたのに、二神が「愛生門」から出て「五智の劍」を手にした時、「日光」は二神のことに変わっている。

また、今回、「於<sup>二</sup>此島<sup>一</sup>、産開、太<sup>二</sup>神道<sup>一</sup>覺<sup>二</sup>心暗<sup>一</sup>。」を、「日光は、此嶋において神道を産み育て、広め、核なる秘密をさとりなさい。」と訳したのは、この「日光」に關係する。この「日光」は後に、二神から誕生する天照大神のことを暗示しているのではないかと考えたためである。

## おわりに

これらを踏まえた上で、はじめに問題としてあげた、金輪王（愛染明王）と天照大神との両性具有性の相違についてであるが、愛染明王が持つ二元性にあったのではないかと考える。

愛染明王の二元性とは、『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』が「一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心品第二」と「愛染王品第五」に分かれており、このことにより、中世期には染愛王と愛染王を同体視する思想が生まれた。

大日如来や天照大神との同体に関しても中世期にしばしば見られる。これは、愛染明王の光背が日輪であることも大きな理由の一つであり、染愛王と愛染王という二元性は既に男女であり、金剛界・胎藏界の両界でもあることに由来する。愛染明王は、この二元性の上に存在する尊格ということになり、中世神話に登場する金輪王・天照大神の性格と重なることになる。

つまり、愛染明王は、院政期においては、修法の中の仏

であつたが中世期において、その形容と二元性により大日如来や天照大神との同体を成し遂げた。その背景には、愛染明王の二元性の中に含まれる両性具有性が大きな役割を果たしたと考える。

この両性具有性は、愛染明王のみに見られるものではなく、『日諱貴本紀』内では、天照大神がこの祖であると説いている。類話である『大神宮本縁』や『日本記三輪流』に見られるものではなく、『日諱貴本紀』独自の記述である。つまり、類話でありながら、他の二つの神話と天照大神の捉え方には違いがあるということである。因みに他の二つの神話で「我」が、初めは金輪王であつたのに、途中から天照大神へと移行している。これだけでも天照大神の両性具有性は伝わりそうであるが、『日諱貴本紀』はあえて別記する必要があつた、強調する必要があつたと考えられる。両性具有である必要性については、記紀神話に見られる近親相姦のような禁忌の中に存在する究極美（もしくは、エリアーデが主張するような、究極的なリァリテイ）ではないかと考える。しかし、この究極美は、金輪王と天照大神では違う。金輪王は、元々国常立尊が成つた姿である。

一方、天照大神はイザナキ・イザナミにより、『日諱貴本紀』が基にした『日本書紀』によると、誕生した両性具有である。つまり、完全なる男女により生を受けたのであるから、自然発生的に誕生した金輪王とは性格が異なり、天照大神の方がより完全な存在となる。その存在を、金輪王と混同して描くことは、同じ両性具有であるから仕方ない部分もあるが、潜在的に秘められた天照大神の性格までもが歪んでしまう。金輪王は愛染明王のことであるが、愛染明王も男女から誕生したわけではない。天照大神より先に、両性具有の性格を有して登場しているにも関わらず、男女から誕生した両性具有とは異なるために、本文内で何も記されていないのではないかと考えた。

また、『日諱貴本紀』のタイトルが大日靈貴つまり天照大神を表すとされることから天照大神を重要視されるのは当然であると考ええる。しかし、愛染明王の名は『日諱貴本紀』に見られないが、愛染明王が中世期において天照大神に匹敵する両性具有の正確を持ち、大日如来の名代をも果たす尊格であったことを無視するわけにはいかない。

それ以外にも、伊藤氏が述べておられるように神道切紙

から『日諱貴本紀』が編集されたとするならば、編集された際に天照大神の両性具有性のみならず、特性について考慮した上で題名が付されたと考えられる。題名についても『日諱貴本紀』だけではなく、『日域本紀』と記す本文もある。また、訓に關してもミシエル・フーコー<sup>39</sup>が「注釈の無限の任務は、解釈が実際に書かれたテクストの全容をいつの日かあきらかにするはずだという約束によって、不安を免れているのにほかならない」また、「知に固有なものは、見ることも証明することでもなく、解釈することなのだ」と述べているのに通ずる思いによるかと考え、今後の課題としていきたい。

注

- (1) 伊藤聡氏「『日諱貴本紀』について―その翻刻と解題―」『古典遺産』第四十四号・一九九四年。
- (2) 阿部泰郎氏・山崎誠氏編集・真福寺善本叢刊第六巻『両部神道集』所収『日諱貴本紀』（臨川書店・一九九九年）
- (3) 前掲(2)『日諱貴本紀』に同じ。
- (4) 前掲(1)伊藤氏論文に同じ。
- (5) 伊藤聡氏『両部神道集』解題（『両部神道集』・五五三頁～五五六頁）。

- (6) 前掲(5) 伊藤氏論文に同じ。
- (7) 前掲(5) 伊藤氏論文に同じ。
- (8) 山本ひろ子氏「至高者たち」(山折哲雄編『日本の神・神の始原』所収・平凡社・一九九五年・三二二頁〜三二二頁)。
- (9) 前掲(5) 伊藤氏論文、五五五頁〜五五六頁。
- (10) 前掲(8) 山本氏論文、三三八頁〜三三六頁。
- (11) 前掲(8) 山本氏論文、三三三頁。
- (12) 『新編日本古典文学全集』。
- (13) 『大正新修大藏經』第七六卷・統諸宗部七。
- (14) 前掲(2) 山本氏論文、三二七頁。
- (15) 小松茂美編・日本絵巻大成7『餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻』中央公論社・一七五頁。
- (16) プラトン『饗宴』(久保勉氏訳『饗宴』・岩波書店・二〇〇三年・七八頁)。
- (17) エリアーデ著作集第六卷『悪魔と両性具有』(宮治昭氏訳『悪魔と両性具有』・せりか書房・一九八一年・一三四頁)。
- (18) 『新編日本古典文学全集』。
- (19) ミルチャー・エリアーデ「地母神と宇宙的な聖体婚姻」(岡三郎氏訳『神話と夢想と秘儀』・国文社・一九八二年・二二五頁)。
- (20) 丸山真男「歴史意識の「古層」」(同氏著『忠誠と反逆』筑摩書房・一九九八年・三六七頁)。
- 『日譚貴本紀』の国譲り神話に見る天照大神の両性具有性

- (21) 伊藤正義氏「日本記一 神代巻取意文」(『人文研究』第二十七卷第九分冊・一九七五年)。
- (22) 田中貴子氏「女神考―謡曲「三輪」における神の性」(『日本の美学』二十一号・一九九四年)。
- (23) 『日譚貴本紀』↓真福寺善本叢刊・第六卷『両部神道集』・一九九九年。
- 『大神宮本縁』↓神奈川県立金沢文庫編『金沢文庫の中世神道資料』一九九六年。
- 『日本記三輪流』↓真福寺善本叢刊・第七卷『中世日本紀集』・一九九九年。
- 「はじめに」で少し触れたが、『日本記三輪流』を比較にあげたのは、三輪流との関係が考えられるためである。そう考えたのは、『日譚貴本紀』が神王に仮託している点である。神王は「ミワオウ」と読む。「神ミワ」という音は偶然であろうか。神王への仮託書が見あたらないということから検証は難しいが、今後、中世期の愛染明王信仰と三輪流という信仰集団への再検討をしていく必要があると考える。今回は、伊藤氏のご指摘の通り、『日譚貴本紀』が「神道切紙」から編纂されたものであることも考慮し、比較検討することにした。
- (24) 妙法院史研究会編『古記録・古文書』第六卷(吉川弘文館・一九八一年・四〇頁〜四二頁)。
- (25) 『新修大正大藏經』。
- (26) 『大日本仏教全書』。

- (27) 『真言宗全書』第五。
- (28) 松長有慶著作集第二卷『インド密教の構造』（法蔵館・一九九八年・二五一頁～二六〇頁）。
- (29) 守山聖真氏『立川邪教とその社会的背景の研究』の「付編『纂元面授』」による。五二九頁。
- (30) 仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書『図像寛成区』十一頁。
- (31) 『大日本仏教全書』。
- (32) 前掲（1）『日本記三輪流』。
- (33) 『新編古典文学全集五十二』。
- (34) 拙稿『愛染王紹隆記』における愛染信仰―法勝寺関連説話を中心に―（大取一馬編・龍谷大学仏教文化研究叢書『中世の文学と思想』・二〇〇八年）。
- (35) 『新編日本古典文学全集一』。
- (36) 神野志隆光氏「古代天皇神話」同氏著（『古事記と日本

- 書紀』講談社・一九九九年・六三頁）。
- (37) 『大正新修大蔵經』。
- (38) 村山修一氏「神仏習合の歴史的素地と三輪流神道の形成」（同氏著『習合思想史論考』塙書房・一九八七年・三一二頁）。
- (39) ミシェル・フーコー「世界という散文」（渡辺一民氏・佐々木明氏訳『言葉と物―人文科学の考古学』二〇〇六年・六六頁～六七頁）。

〔付記〕

本稿は、平成二〇年度佛敎文学会・本部五月例会において口頭発表したものに、加筆・訂正したものである。席上、ご教示下さいました諸先生方には、この場をかりて厚く御礼申し上げます。

（本学大学院博士後期課程）